



第109号
北海道教育大学
青陵会

(北海道教育大学岩見沢校同窓会)

会長 早瀬 公平

印刷 北海道社会福祉事業団福祉村
(TEL 0126-45-2300)

〈題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです〉



- も ○巻頭言…… 1 ○退職支部長からのメッセージ…… 2～3 ○支部だより…… 4
- く ○各学科卒業生代表の言葉…… 5 ○各学科の活動状況…… 5～6
- じ ○事務局だより…… 7

恩 送 り

北海道教育大学青陵会 副会長 網 渕 秀 幸



全国の会員の皆様には、ますますご健勝にてお過ごしのことと存じます。

一月十六日朝刊の『コロナ確認二年姿変えて6度襲来』の見出しが目を引きました。昨年秋季以降は、急速に減少傾向に転じ、経済活性化との両立も見えてきた頃に再びオミクロン株の爆発的な感染拡大が始まりました。エッセンシャルワーカー、高齢者から始まったワクチン二回接種もブレイクスルー感染で危うい状況に。早めに接種した私も不安に駆られる日々です。

この会報が発行される頃には、五歳から十一歳のワクチン接種も開始される見通しですが、保護者の複雑な胸の内を聞かされ、現場を預かる立場として困惑しています。早く、行動制限もなく平穏な日常を取り戻したいと願うばかりです。

さて、学びの連続性という言葉が示されて久しいのですが、幼稚園教育要領にもそのことがしっかり明記

されるようになりました。先日、近くの小学校一年生との交流と授業参観をさせて頂きました。国の『GIGAスクール構想』で、子ども達には一人一台のタブレットが使用可能となり、一年生が『ロイロノート』を使いこなした自分の考えを発表するという場面を参観しました。驚きと今後の教育現場でのICTを活用した授業の限らない可能性を感じました。

コロナ禍で一気に進んだ教育現場のICT活用。社会全体も在宅勤務のテレワークが新たな働き方に繋がります。コロナ禍が社会に与えた影響は、良くも悪くも計り知れないものがあります。瞬時に繋がる手段としての情報通信手段は、今後も様々に形を変えて進化するものと推測します。

我が同窓会青陵会も大学改編に伴いこれまでの教員を中心とした同窓会から『岩見沢校卒業生全てが同窓会』の発想の転換と組織の再構築を図るべく早瀬会長を中心に様々な改革に着手し役員が一丸となり知恵を出し

合い進化の最中です。とりわけ新入生には、『会員相互の親睦と資質の向上』を目指した事業展開と学生への支援を中心とした事業を展開していることを周知、理解してもらおう手立てに工夫改善を置き取り組んでいきます。全国で活躍の会員の皆様には置かれましても生まれ変わろうとしている青陵会へのご支援を宜しくお願い申し上げます。

最後に、今年も私が剣道でお世話になった北見市の田中満朗先生から、清水寺の森貫主が書かれた干支色紙の『虎嘯』が届きました。この意味を理解して心して頑張りなさいと励まされた気持ちになりました。また、手紙には、『今までお世話になった方々は、他界し恩返しができない。』だから今は『恩送り』と表現された先生がいて、自分はそのような気持ちで精いっぱい仕事を続けたいとの力強いお言葉があり感銘しました。

同窓会も、たくさんの先輩にお世話になり、今の自分があり今度は自分が『恩返し、恩送り』をする番なのだろうと思えました。

会員の皆さん、寅年にコロナが終息し皆さんがご健勝でご活躍されることを心より祈念致します。

退職支部長からのメッセージ



教員人生に悔いなし
札幌支部長
白川 典 洋

両親の故郷のため、幼い頃から岩見沢には縁がありました。小学生の頃の岩見沢神社の祭典は、大々的だったと記憶しています。国道十二号線から市役所に至る中央通りの両側に露店が立ち並び、多くの人で賑わっていた様子が脳裏に焼き付いています。どこか仄々とした感じがあり、私は大好きな町でした。大学進学にあたり、岩見沢で過ごすことになるとは考えも及びませんでした。

昭和五五年の入学時は、校門左側に旧校舎があり、サークル棟として使用されてきました。私は、哲学倫理学研究室に所属しました。「一社」のサークル室がありました。何故か哲倫には外国語との共同部屋が存在しました。入口から近かったため、ほぼそちらで過ごしていました。

一年時は、硬式テニス部がなかったもので、札幌校の練習に参加させてもらいました。私が二年になって、全天候のテニスコートができましたので、硬式テニス同好会を立ち上げました。私は、真面目な学生ではありませんでしたが、やりたいことはほぼ成し遂げました

ので、学生時代に悔いはありません。

卒業後、教師として最初の赴任地は道東の根室でした。右も左も分からぬ若造に、多少の失敗は大目に見て、いつも「先生、先生！」と声をかけてくれる人情味あふれる世界でした。平成十七年から三年間、在外教育施設（中国・大連）に勤務しました。その後の教員生活に多大な影響を及ぼす貴重な経験だったと思います。教頭時代には、福島原発問題により自主避難した東北地方の多くの保護者・子どもたちとの出会いがありました。語れば際限はありません。あつという間に時は過ぎましたが、教員人生にも悔いなしです。

学生時代からそうでしたが、私はつくづく人に恵まれた人生だと思えます。今の自分があるのは、同期のおかげであり、多くの先輩・後輩の助けがあったからだと思底思っています。今年度、支部長という大役を仰せつかりましたが、何もできずに終わりで大変申し訳なく思っています。

コロナの終息は未だ見え、先行き不透明な日々が続きます。青陵会の皆様が健康で、ますます活躍されますことを願っております。お世話になった皆様に心から感謝申し上げます。退任の挨拶といたします。



良き教員人生でした！
石狩支部長
安 保 幸 司

石狩支部はおかげさまで今年度五十周年を迎えることができました。

これもひとえに青陵会本部をはじめ、各支部の皆様を支えられ構築できたことです。あらためて感謝致します。

現在会員三〇〇名程度、数だけでなく、石狩教育の各場面で青陵の存在は欠かすことはできません。

「磨き合い 高め合う」を合言葉に、研修を中核として活動を進めてきました。一言に五十年と言っても、諸先輩たちの並々な努力の賜物以外、何物でもありません。

個人としても退職を迎える年となつてしまいました。何のとりえもない私に知恵と勇気を与えてくださった学生時代の先生や先輩・仲間たちには今さらながら、深く感謝です。

就職後も、一番面倒を見てくれ、影響を受けた先生は同窓の方でした。教師のいろはを教わり、指導技術の真髓をよく飲みながら学びました。

そんな教員経験をもとに、管理職としても力添えをいただいたのは、やはり、同窓の仲間でした。一筋縄ではない経営もありましたが、心

強く励まし、助言をいただきました。

石狩支部は今、特に若手の人材育成に尽力しています。良い教師として、そしてその延長でよき経営者へと導きます。これは私たちが先輩にされてきたことを、後輩たちに施そうとしています。気が付くと心を許せる一番の存在も同窓です。

私は第一志望ではありませんでしたが岩見沢校で学べて本当によかったと思います。実直で泥臭く努力を重ねる味わい深い人が多くいます。

縁なのか、この年になって萩の山市民スキー場によく行くようになりました。なんと、御年九十歳を越えられた野村先生（音楽研究室）が毎日滑られています。刺激を受けて、六十歳の私も上手くなった錯覚に陥っています。これも人生の楽しみ：とも感じています。

ちなみに、今年ご退官される越山先生が大学に着任された頃の学生でした。当時一番元気の良かった先生をコンパの度、家に送り届けるのが役割でした。大きな人柄（ガタイでなく…）は、今の私の目標です。

北海道教育に計り知れないほどの実績を残してきた青陵会。今後も後輩たちのためにも結束をより強め、益々発展することを切に願います。ありがとうございます！



青陵会とともに
オホーツク支部長
清水洋人

先日、オホーツク支部の総会が終わり、令和四年度の新役員が承認されました。大したこともしていないのに、何だか肩の荷が下りたような妙な感覚でした。支部長は年を取って、最長老になると自然に選ばれます。支部長に就任したときは、とうとう私も最長老か…という思いが頭を横切りました

私と青陵のかかわりは平成十六年からです。前任の学校で私の転勤が決まった時に当時の校長と面接をして、ポロツと「私もこの年ですから、次のことを考えないとダメなのでしようね。」と言ったことが私の運命を変えました。次の日には青陵の事務局長がやってきて、「教頭志望の清水先生です。」と紹介されました。

今まで大学の同窓会なんて見向きもしなかったし、そんなものがあることすら知りませんでした。もちろん会費すら払ったことはありません。

当時は総会で研修の時間があり、若手教師の研修発表があり、私が発表をするように命ぜられました。

(この年は爆弾低気圧の影響で、総

会が延期された」と記憶しています。

平成十七年から教頭となって、本格的に青陵オホーツクに参加することとなりました。一番厳しかったなと思っただけは、研修の論文添削でした。今はコロナ禍で集まることはないので、当時は研修担当の校長先生から、その場で論文の課題を出され、資料も見ることなくその場で作成しました。

従って、事前に作成した論題と合わなかつたら、何を書いていいかわからず、講評も惨憺たるものになりました。そんな私でも教頭を経て、校長に慣れたのも偏に青陵会で揉まれて生きてきたおかげでないかと思っています。

教員生活の半分を青陵会とともに生きてきました。しかしながら、青陵会も教員の減少とともに、だんだんと規模が小さくなつてきています。今は発行されていませんが、青陵の同窓会名簿を見ていて、今まで三ページあったオホーツク会員が二ページとなり、やがて一ページとなつてしまいました。だんだん少なくなつていく中で、いよいよ私の番かと思うと寂しさを感じてしまいます。

老兵は死なず…ただ消えゆくのみ
ありがとうございました。

百周年に向けて

副理事長
島 恵 司

北海道教育大学岩見沢校は、令和五年に創設から百年を迎えます。

北海道教育大学岩見沢校の歴史は、大正十二年（一九二三年）に遡ります。大正十二年といえば、関東大震災があった年です。震災が起こったのが九月。その半年前の四月、「北海道庁立実業補習学校教員養成所」として創立されたのが始まりです。

そして昭和十年に「北海道庁立青年学校教員養成所」と改称し、十九年には文部省直轄の「北海道青年師範学校」と昇格しました。

その後は、昭和二十四年に「北海道学芸大学札幌分校岩見沢分教場」、二十九年に「北海道学芸大学岩見沢分校」、四十一年に「北海道教育大学教育学部岩見沢分校」、平成五年に「北海道教育大学教育学部岩見沢校」、十六年に「国立大学法人 北海道教育大学岩見沢校」と六度に渡る校名の変遷があり、現在に至っています。

教員養成大学として長い歴史を経てきましたが、北海道教育大学の再編にともない、平成十八年に岩見沢校の教員養成課程の募集が停止され、「芸術課程、スポーツ教育課程」が

設置されました。そして平成二十六年から「芸術・スポーツ文化学科」として再出発しました。現在の学生たちは、自分の強みを生かして社会に貢献できる人材になることを目指して大学に入學してきました。

ですから、音楽・美術の高度な芸術センスや、卓越したスポーツ技能を活かし、文化としての芸術・スポーツを通して様々な形で地域に貢献しています。

教員養成課程が廃止されてからは、大学卒業後の進路も大きく変わり、公務員・一般企業で活躍する卒業生が大半を占めるようになりました。

一方、少数ではありますが、中学・高校の音楽や美術、保健体育の教員免許取得を目指し勉学に励み、教員として活躍する卒業生もいます。このような中、教員をはじめ、公務員・一般企業・経営者等、様々な分野で活躍する青陵会員が、令和五年に一堂に会して創設百年を祝い、親睦や情報交流する機会となるよう、昨年には準備委員会を立ち上げたところです。大きな節目となる次年度をどうぞ楽しみにしてください。

時代の変遷と共に様変わりしてきた北海道教育大学岩見沢校ですが、今後も更なる深化・発展を続けていくことを願っています。

支部だより



(札幌市立月寒小学校)

春を待つ思いで

札幌支部 事務局長

小松 靖一

札幌支部の例年の活動は、五月の総会から始まります。

「仲間づくりは参加から、ひとつ窓辺の磨き合い、かたい絆で助け合う」この言葉に支えられながら、多くの研修・懇親の機会を通して、互いに支え合い、互いに高め合える札幌支部を培ってきました。

- ・五月…定期総会・懇親会
- ・七月…全市一斉懇親会（各区）

学校経営研修会

- ・八月…二地区合同実務研修会・懇親会

懇親会

- ・九月…学校実務研修会・懇親会
- ・十月…中学校連絡研修会・懇親会

会

- ・十一月…学校課題研修会
- ・十二月…大忘年会

- ・三月…春の学校経営研修会

この他にも各区で実施されている研修会や懇親会もあり、各会員が様々な場を通して、横と縦の繋がりを強めています。残念ながらこの二年間は、コロナ禍で全ての研修会・懇親会を中止にせざるを得ませんでした。

仲間と笑顔で直接語り合うことのできない期間は、大変残念であると同時に、コロナが終息した後に、元のような組織、そして活動を取り戻すことができるのか不安を覚えます。

そんな中でも、組織部による名簿の更新や広報部による広報紙の発行など、地道な活動は続けています。特に名簿については、今年度から全てをデータ化し、個人情報保護と共に、必要な部分の名簿をすぐにグループ化したり、ソートしたりすることができるようになりました。雪の下で春を待つ小さな芽のように、各部が次なる活動の準備を地道に進めてくださっているのは、ありがたく、明日への希望です。

コロナとは別に札幌支部でも今後の大きな課題と言えるのは、会員数の自然減です。母校の状況から、これはどこの支部でも共通した課題だと思います。数年前から「今と未来を語る会」を組織し、その課題解決に向き合ってきました。道青陵の「在り方検討委員会」と連携しながら、何とか良い解決策を見つけていきたいと思っています。

最後に、一日も早く、また全道の皆様と顔を合わせて語り合える日を心待ちにしております。どうぞ皆様、ご自愛ください。



(三笠市立岡山小学校)

同窓の新たな形の構築

空知支部 事務局長

高岸 春一

令和三年度の空知青陵会は、コロナ禍の中、様々な事業の中止、延期を余儀なくされてきました。五月に予定されていた空知青陵会評議員会・空知青陵親和会の総会・懇親会をはじめ、会での会議・研修会がほとんど行えず、不安を抱えたままでの活動に終始してきました。しかし、コロナが若干収まった昨年十二月に空知青陵親和会の全体研修会で久々に顔を合わせることができました。

当日は、来賓として、北海道青陵会の早瀬公平会長から挨拶を頂き、今後の同窓会の在り方と令和五年に迫った百周年記念事業のお話もしていただき、改めて、同窓会の在り方と継続していく難しさを共有したものです。

今年度の空知青陵会では、親和会を中心に、校長採用、教頭・主幹教諭選考に向けた研修会だけは継続して行ってきました。校長採用試験には十五名が臨みました。四つの受検グループにそれぞれ二、三名の講師の校長先生を配し、論文作成、面接指導をくりかえしました。教頭・主幹教諭選考には、教頭に二名、主幹

教諭に三名が挑戦しました。研修の中では、様々な教育施策、自校の地域性や子どもの実態などに広い視野を持つて日々の実践を積み上げていくことが、それぞれの力量を培うことになり、更に、自分のストロングポイントを学校経営・運営に発揮する自覚が芽生えていきました。

四月からの採用・昇任を心待ちにしているところです。一月二十九日には、空知青陵会実践交流会・感謝の集いを開催する予定でしたが、コロナウイルス感染者の激増により、急遽、中止することとなりました。

実践交流会には、同窓で、現在、駒澤大学苫小牧高校で教鞭をとられている佐藤千尋様を講師に、「自らを磨き、進んで社会・学校づくりに貢献できる人間の育成」を主題にご講演をいただき予定でした。

講演内容は、オンデマンドで会員に周知しました。また、十四名のご勇退者に対して、感謝状と記念品を事務局長が手渡すこととなりました。

空知管内も公立小中学校数が百を割り、義務教育学校や小中一貫校に変わりつつある過渡期を迎えています。変わりゆく母校と同窓会のひざ元で、新たな同窓の道の模索に尽力しながら、青陵会を支えていきたいと思えます。

卒業生代表のことば



芸術・スポーツビジネス専攻
中川 旭生

私にとつての大学生生活は、自分自身がどこまで成長できるのか、ひたすら挑戦し続けた四年間でした。

授業の一環で取り組んだイベント運営では、専攻の同期と協力してブースをいくつか考案・運営しました。三千人近いメンバーをまとめること、頻発するイレギュラーへの対応等、悩むことも多々ありました。しかし、この経験でしか得られない学びがあると考え、常に取り組みを反省し次のアクションへ繋げました。無事にイベントを成功させたのは支えてくれた仲間のおかげです。

学外でも吹奏楽団での全国大会出場、アルバイト先での管理職としての経験等、自らハードな環境に飛び込んだことで多くの学びを得ることができました。

新型コロナウイルスの影響でキャンパスへの通学、同期との対面でのコミュニケーションができたのは約二年間でしたが、私にとつてかけがえのない財産です。岩見沢校の環境がなければ今の私はありません。後輩たちにもまた、充実した四年間だった

たと思えるような大学生活を過ごしてほしいと切に願います。



美術文化専攻
長井 千佳

入学式を迎えて間もない頃の私たちは、さあこれからどんなものを作ろうか、どんなものを描こうか、緊張と不安に大学生活への期待と興奮が混ざり合い、きらきらと輝いていたに違いありません。

しかし、新型コロナウイルスが私たちの僅かな時間を、徐々に徐々に吸収し奪い去ってしまうとは、誰一人予想だにしていまませんでした。この未曾有のコロナ渦に、人の心を癒し、人の生活に寄り添い、人生をより楽しく美しいものへと変えていく美術について、私たちが長い時間をかけて考え、学び、発信していったことは全て、学生という期間を生きる中で非常に貴重な経験であったといえます。

「世界は自分で切り拓く」。これは、私が美術の論文を書く中で多くの英文に触れ、言葉の壁や表現の壁に直面した時、心の中に表れた言葉です。思えば、私たち美術文化専攻生は、それぞれの作品制作や論文執筆に立ちただかる壁を、それぞれが持つ能

力や思考で突破してきたのです。私たちが育ててくれ、支えてくれた人たちの想いを忘れずに、これからもより一層、精進していきたいです。



スポーツ文化専攻
三瓶 千夏

大学入学から卒業までを振り返ると、とても濃い4年を過ごすことができたと感じます。

私は今まで、自分から進んで何かに取り組んだり、積極的に何かをすることをあまりしてきませんでした。3年生の時に青陵会の皆さんの力をお借りして初めて自分で一からイベントを企画し、実行に移しました。何も知らないところからスタートして、色々試行錯誤しながらたくさんの方の力をお借りしてなんとかイベントを成功させることが出来ました。

イベントを成功させることが出来たのは、自分だけではなく、様々な人の力や繋がりがあつてこそであり、感謝しかありません。

このイベントのおかげで、自分ができることの可能性の広さを知ることが出来ました。大学卒業後も自分の夢・成し遂げたいことの実現に向けて行動していきたいと思えます。

青陵会の皆さんのご協力がなければここまで来れることは出来ませんでした。この場をお借りして感謝申し上げます。

各学科の活動状況

「芸術・スポーツビジネス専攻の日常活動」

鴻野 寛 太

芸術・スポーツビジネス専攻は、今年度も新型コロナウイルスの影響を受けながらも、少しずつ対面での授業が増えていった。後期からは、本格的に対面での授業が再開された。また、オンライン授業と対面授業のどちらにも対応したハイブリッド型の授業形態もみられた。

そのような状況の中、スポーツ系研究室に所属する二年生の学生は、地域プロジェクトの授業の一環でゲートボールによる交流会イベントを実施した。このイベントには、ビジネス専攻の多くの学生が参加し、学年を越えた交流がみられた。縦のつながりが薄いビジネス専攻にとつて良いイベントであり、新型コロナウイルスの影響によって外出自粛をしていた

学生にとっては、同じ専攻内の学生と仲を深めるためのきっかけとなった。

毎年三年生がビジネスに関する理解を深めるための研修旅行である「ビジネスストレンド」は今年度も延期となった。新型コロナウイルスの影響があるため海外渡航は難しく、国内を視野に入れて研修旅行を計画すると思われる。「ビジネスストレンド」は、四年生時に各研究室に分かれて実施される予定である。

対面授業が再開された後期であったが、新型コロナウイルスのオミクロン株が急速に感染拡大し、学内でも感染者が増えた。そのため、三年生のケーススタディー発表と四年生の卒業論文発表は、オンラインで実施された。オンラインでの実施は、大雪などの交通障害の心配がない点、資料が見やすい点などの長所があるものの、同じ空間で行う緊張感などの空気感を感じることができなくなる。

オンラインと対面での授業の切り替えなど、新型コロナウイルスの感染状況にあわせて、柔軟に対応した学生生活を送ることを強いられた一年間であった。コロナ禍での新たな芸術とスポーツの価値を見出し提供

することが必要とされるだろう。

「音楽専攻の日常活動」

石坂航

音楽文化専攻は、鍵盤楽器、作曲、声楽、管弦打楽器、音楽教育・音楽文化の5つのコースに分かれ、必修科目や教職科目の他に音楽の専門的な授業を受講することができます。

ソルフェージュや音楽理論などの音楽の基礎となるような授業をはじめ、実技レッスン、オーケストラ・吹奏楽の合奏、室内楽等の本格的な音楽の勉強をすることができます。

音楽文化専攻には教員や公務員を志す者がいることはもちろんのこと、プロの音楽家、一般就職、大学院進学や海外留学を考えている人も多いため、本格的な音楽の授業を受けられるという事はとても重要な機会です。

また、札幌交響楽団の先生方のレッスンを受けられる事や、今の時代を駆け巡っている教授や准教授の先生方の下で音楽を学べるという事も、この大学の強みと言えます。

音楽文化専攻の学生は日々授業を受けるだけでなく、自分が専攻している楽器や副科として受講している

楽器などの練習も行っています。個人的な練習はもちろんのこと、各自のコンクールや演奏会に向けて練習を行い、日々研鑽を積んでおります。

今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響のため一部の講義でオンラインとなりましたが、実技系の講義のみ感染症対策を行った上で様々な制限を設けて対面形式となりました。

昨年は学外の演奏活動が、ほとんどなく、毎年行っていた定期演奏会も無観客で行い、YouTubeで配信するという形での公開となりました。しかし、今年度は感染対策を徹底した上で定期演奏会を含め、いくつかの学外での演奏活動ができました。

今もまだコロナ禍にあり来年度の見通しが立ちませんが、少しでも音楽活動が活発になりますことを願っております。また、学生一同、音楽と真摯に向き合い、高い目標に向かって頑張っていきたいと思っております。

「スポーツ文化専攻の日常活動」

山崎由茉

スポーツ文化専攻は、高度なパフォーマンスを競い合う競技スポーツ、健

康を増進するフィットネス、多様な人々と楽しみを共有するアダプテッド・スポーツ、そしてからだ全身で自然に向き合うアウトドアスポーツなどのスポーツの特性を科学的に理解し、地域の人々の暮らしを豊かにしていくため、日々勉強や部活動に励んでいます。

私が所属するアウトドア・ライフコースでは、アウトドア・アクティビティ、野外教育、環境教育を通じて、自然と共生する暮らしの在り方を追求します。一年目・二年目では、主に環境科学の素養を身に付け、様々なアウトドア・アクティビティの経験を通し、自然に対する感性を磨いていきます。三年目・四年目では、これまでの経験を基に、実際にプログラムを指導することや、研究室に分かれ、人と自然との関わり方について日々研究をしています。

しかし、およそ二年前に発生し、未だ大流行している新型コロナウイルスにより、依然として私たちの多くは様々な生活上の制限を受けています。

日々の授業では、基本的に遠隔授業が進められており、本来であれば野外で行う活動が、口頭のみでの説

明で終わってしまう場合や、地域の人々との活動が中止になってしまうなど、様々な学びの場を失いつつあります。

一方で、このような状況であるからこそ、学ぶことも多くあると考えます。例年であれば対面で行われるセミナー等がオンライン開催に切り替わることで、北海道のみならずいろいろな場に気軽に参加することができます。

このように予測困難な状況下でも学び続けることをやめず、前を向くことが非常に大切であり、時代に合った、人と自然の関わり方を考えるなど、日々研究を深めていきたいです。最後になりますが、私たちがこのような生活を送れているのは、日々最前線で対応されている医療従事者の方々はもちろん、大学関係者や青陵会の皆様のおかげであります。心からの敬意と感謝を表すとともに、新型コロナウイルスが一刻も早く終息し平穏な日々が訪れることを願っております。

事務局便り

理事長 藤田 祐二

会員の皆様におかれましては、日頃から、青陵会の活動の推進に対し、ご理解とご協力をいただきありがとうございます。ことに、心から感謝を申し上げます。

本年度も、新型コロナウイルス感染症の拡大により、親睦と資質の向上をめざす青陵会の活動の多くが中止や延期となり、また、各支部におかれましては、計画していた事業が思うように進まなかったのではないかと推察するところでは、一日も早く感染が収束し、再び同窓会活動の活性化に取り組める日が来ることを願っています。

さて、事務局では、創立百周年を令和五年度に控え、少しずつではありますが準備を進めているほか、同窓会の在り方検討委員会の最終答申を踏まえた取組について具体的な検討を始めておりますので、それらを含めこの一年で取り組んだことについてお知らせします。

一 令和三年度総会及び各部の主な取組について

総会につきましては、令和二年度同様、各支部への議案の送付による提案と、議決書の提出による議決を行い、六月二十一日に総会議案が承認されました。

また、各部では、退職会員への会報の送付、研修誌「望岳」の頒布、期別の同窓会名簿の作成、会報の発行、学生活動支援事業の実施などに取り組んでまいりました。

二 創立百周年記念事業について

令和五年度は、青陵会が創立百周年を迎える年となります。そのため、記念事業の実施に当たっては、岩見沢校と青陵会が連携・協力して業務を推進することとなりましたので、報告させていただきます。

さきに岩見沢校と青陵会の代表者による合同準備委員会を開催し、記念事業の主催者の名称を「北海道教育大学岩見沢校・北海道教育大学青陵会『創立百周年を祝う会』実行委員会」とすること、主な事業内容として記念式典、祝賀会、記念誌発刊などとすることについて、準備委員会段階で確認しているところです。

なお、記念式典及び祝賀会については、各方面との調整を要することから、令和五年九月二十三日（土）で確定し、青陵会HPに掲載しておりますので、ご了承ください。

三 今後の同窓会の在り方について

これまで会員の多くが教員であった青陵会ですが、今後は教員になる卒業生の数が限られてくることから、その在り方を検討委員会で協議いただいたところであります。

現在、検討委員会の最終報告でお願いいただいた「同窓会の入会を大卒入学時に行い、大学在学中は準会員扱いにするなどの対応を検討する必要がある」という点を中心に、会則の見直しに向けた準備を進めているところであり、引き続き、機会をとらえて情報発信してまいります。

以上、一年間の主な取組をお知らせしてまいりましたが、本年度は事務局から各支部への日常的な連絡が極めて少なく、大変申し訳なく心からお詫びを申し上げます。新型コロナウイルスの感染が続く中にあっても、青陵会のつながりが充実するよう努めてまいりたいと考えておりますので、引き続き、会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

北海道教育大学青陵会 (令和4年度総会のご案内予定)

日時 令和4年5月21日(土) 13:30~

会場 ホテル・サンプラザ

※後日改めてご連絡申し上げます

なお、コロナ禍の状況によっては中止する場合がありますので、ご承知おき下さい。

編集後記

会報一〇九号をお届けいたします。

本部・各部、各部の活動や研究会等が例年通りには行うことができない中、本号の発行にあたり、玉稿をお寄せくださった皆様にご心よりお礼を申し上げます。先号に続き発行が例年より大幅に遅れてしまい申し訳なく思っておりますが、無事、ノルマの年二回の発行をすることができ、担当としては正直ほっとしております。

紙面づくりを工夫していききたいと思いますので、良い情報等がありましたらぜひお寄せください。

《広報・情報発信担当》

・部長 新保 秀樹

(栗山町継立小学校)

・副部長 林 宏和

(岩見沢市豊中学校)

・渋谷 憲一

(妹背牛小学校)

・部員 一ノ瀬 健太郎

(岩見沢市東小学校)

・小野寺 英樹

(深川中学校)

・沢 泰宏

(岩見沢第一小学校)

・鈴木 輝光

(千歳市第二小学校)